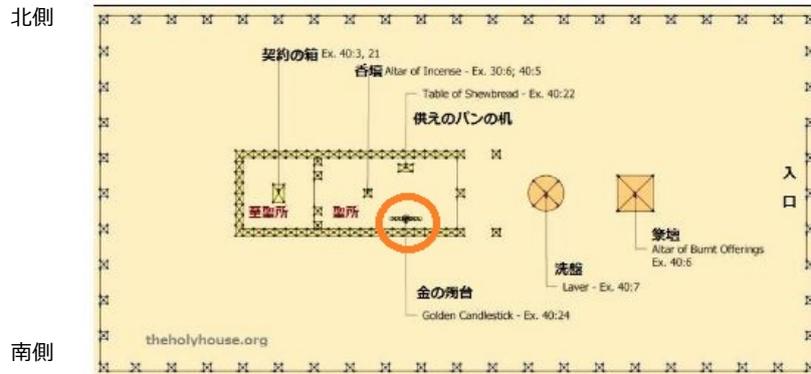


「純金の燭台」に象徴されるイエシュア



ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての第九回目の学びです。今回は、幕屋における「聖所」(「ミクダシユ」מִקְדָּשׁ)の三つの器具の中から、北側に置かれている「供えのパンの机」について取り上げました。今回はその向かい側(南側)に置かれている「純金の燭台」(「メノーラー」מְנוֹרָה)について取り上げます。「燭台」についての記述は、出エジプト記 25 章 31~40 節、37 章 17~24 節、民数記 8 章 1~4 節等がありますが、ここでは出エジプト記 25 章 31~40 節をメインテキストとしたいと思います。

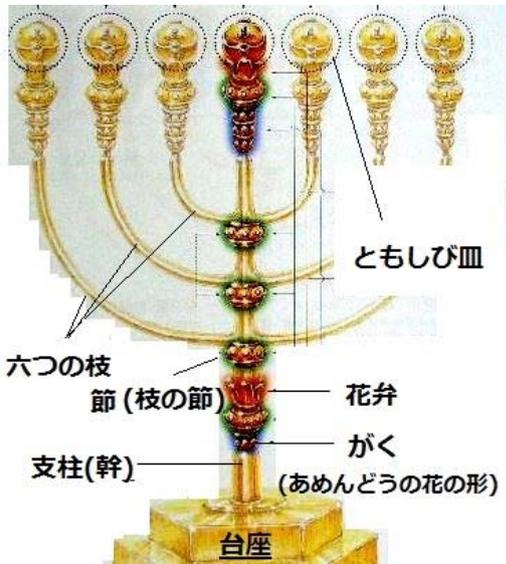
【新改訳改訂第 3 版】出エジプト記 25 章 31~40 節

- 31 また、純金の燭台を作る。その燭台は槌で打って作らなければならない。
それには、台座と支柱と、がくと節と花卉がなければならない。
- 32 六つの枝をそのわきから、すなわち燭台の三つの枝を一方のわきから、燭台の他の三つの枝を他のわきから出す。
- 33 一方の枝に、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくを、また、他方の枝にも、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくをつける。
燭台から出る六つの枝をみな、そのようにする。
- 34 燭台の支柱には、アーモンドの花の形をした節と花卉のある四つのがくをつける。
- 35 それから出る一對の枝の下に一つの節、それから出る次の一對の枝の下に一つの節、それから出るその次の一對の枝の下に一つの節。このように六つの枝が燭台から出ていることになる。
- 36 それらの節と枝とは燭台と一体にし、その全体は一つの純金を打って作らなければならない。
- 37 それにともしび皿を七つ作る。ともしび皿を上げて、その前方を照らすようにする。
- 38 その心切りばさみも心取り皿も純金である。
- 39 純金一タラントで燭台とこれらのすべての用具を作らなければならない。
- 40 よく注意して、あなたが山で示される型どおりに作れ。



1. 「燭台」(メノーラー)の概要

●「燭台」と訳される「メノーラー」(מְנוֹרָה)は「ともしび」を意味する「ネール」(נֵר)と関係し、「燈火台」(ランプスタンド)を意味します。



(1) 形状

●左図を見ると(下から)、以下の七つの部分からなっています。

- ① 「台座」(「ヤーレーフ」יָרֵף)
- ② 「支柱」(「カーネー」קַנֵּה)
- ③ 「がつ」(「ガーヴィーア」גַּבְיֵעַ)
- ④ 「節」(「カフトール」כַּפְתֹּר)
- ⑤ 「花弁」(「ペラハ」פְּרַח)
- ⑥ 「六つの枝」(「カーニーム」קַנִּים)
- ⑦ 「ともしび皿」(「ネール」נֵר)

(2) 材料

●「燭台」の材料は1 タラントの純金で作られたもので、木は一切使われていません。タラントはヘブル人が用いた重量単位としては最大のもので、1 タラントの重さは **34.2 ㌔**と言われますから、相当な重さであったことが分かります。ちなみに、相撲で優勝した力士に与えられる賜杯は天皇賜杯で 29 ㌔、内閣総理大臣杯(右図)で 40.8 ㌔だそうです。



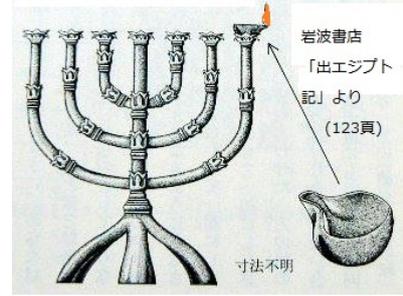
●荒野で宿営全体が移動するとき、幕屋も解体されて運ぶことになりますが、燭台の場合どのようにして運ぶのでしょうか。祭壇や机、香壇、契約の箱には必ず、運ぶための棒とその棒を通すための環があるのに対し、燭台にはそうした環がありません。民数記 3 章 10 節には、「燭台とそのすべての器具をじゅごんの皮のおおいの中に入れ、これをかつぎ台に乗せる。」とだけ記されています。つまり、台に乗せて運んだようです。

(3) 製作方法

●驚くべきことは、「燭台」はすべて「槌で打って」作られたということです。鋳型にはめたり、部分ごとに作られた後で接合したりして作られたのではなく、金の板を「ミクシャー」(מִקְשָׁה)と言われる「打ち出し細工」によって「継ぎ目なしに」作られました。これにはきわめて高度なスキルが求められたはずです。しかも寸法についての指示が一切ありません。槌だけで作るのは大変なことであったはずです。

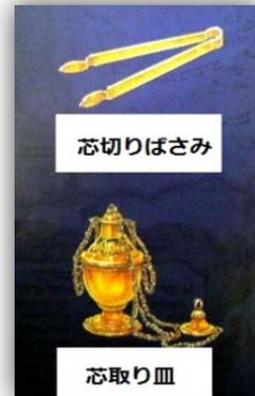
מִשְׁכָּן

●燭台は油が通るように内部が空洞であったとする解釈があります。しかしそれは少々疑問です。右図(岩波書店の出エジプト記のイラスト)にあるように、上部のアーモンドの花をかたどった「ともしび皿」の上に陶器製のランプを載せたか、あるいは、くぼんだ「ともしび皿」に直接、油を注いで用いたのかもしれませんが、蠟燭が発明されるのはギリシア・ローマ時代だと言われているから、「燭台」ではなく、むしろ「ランプスタンド」と言ったほうが正確です。



(4) 付属品

●純金の燭台には二つの付属品があります。ひとつは「心(芯)切りばさみ」(「マルカーハ」 מַלְקָח)でランプの燃え尽きた部分を切り取るための道具であり、もう一つは「心(芯)取り皿」(「マフター」 מַחְתָּה)でその切り取った芯を入れるためのものです。いずれも純金です。このことは出エジプト記 37 章 23 節に記されています。



(5) 配置の指示

【新改訳改訂第3版】民数記 8 章 1～4 節

- 1【主】はモーセに告げて仰せられた。
- 2「アロンに告げて言え。あなたがともしび皿を上げるときは、七つのともしび皿が燭台の前を照らすようにしなさい。」
- 3 アロンはそうにした。【主】がモーセに命じられたとおりに、前に向けて燭台のともしび皿を、取りつけた。

●「ともしび皿を上げるときは、七つのともしび皿が燭台の前を照らすようにしなさい。」という指示は、祭司アロンに告げられました。「ともしび皿を上げるとき」と新改訳は訳していますが、口語訳では「ともし火をともし時」と訳しています。つまり、点火することを意味しています。その際、光が燭台の前を照らすようにしなさいというのが、神の指示でした。燭台(「メノーラー」 מְנוֹרָה)の前を照らすとはどういうことでしょうか。それは、聖所の中にあるパンを供える「机」、**「垂れ幕」**、垂れ幕の前に置かれている**「香壇」**を照らすということです。したがって、そのような位置に燭台を設置しなければなりません。聖所の中は北側と南側の壁が金を被せた板ですから、燭台の火の光を壁板に反射する形で配置すれば、全体を明るくすることができます。

●そもそも、モーセの時代の「メノーラー」は聖所にあるため、祭司だけしか見ることはできませんでしたが、全体としては、台座があり、支柱とその左右にはそれぞれ三つの枝(六つの枝)があって、その一番上に「ともしび皿」があるという形状です。「ともしび皿」には、純粋なオリーブ油と芯があって、そこに点火するようになっていました。出エジプト記 27 章 20～21 節によれば、上質の純粋なオリーブ油はイスラエルの民の自発的なささげものによるものでした。アロンとその子らは夕方から朝まで、主の前にともしびを整える(つまり、消えることがないように油を補給する)責任がありました。

2. 純金の燭台に象徴されているイエシュア

●モーセの幕屋の聖所の中にある三つの器具(パンの机、燭台、香壇)はすべて神の御子イエシュアを啓示しています。今回は「燭台」が意味していることが何かを探り求めたいと思いますが、順序として、燭台を構成している部分の中から三つの事柄、すなわち「台座」と、支柱と枝に施された「アーモンドの花のかたちをした節と花卉のあるがく」のデザイン、そして燭台の火の「光」について順次取り上げ、そこに隠されている神の秘密を探りたいと思います。

(1) 「台座」

●「メノーラー」には「台座」と言われる土台があり、そこから支柱が立てられて、左右に六つの枝が上に伸びています。「台座」という訳語は幕屋の柱を据える時の「台座」もあれば、燭台の「台座」もあります。ただし、訳語は同じでも原語が異なっています。柱を支える「台座」の原語は「アドゥナー」(אֲדֹנָי)で普通複数形(「アダーニーム」אֲדֹנָיִם)で使われますが、燭台を支えている「台座」に使われている原語は「ヤーレーフ」(יָרֵף)です。辞書には「もも、太腿、腰」となっていますが、この語彙の真の意味は「男女の生殖器を表す隠語」のようです。ちなみに、幕屋でささげられる動物のいけにえにある「もも(肉)」の場合には、「ショーク」(שׁוֹק)という別の語彙が使われています。

●「ヤーレーフ」(יָרֵף)が「生殖器」の隠語として使われている最初の例は、アブラハムが自分の息子イサクのために嫁を捜してくるよう頼んだ場面です。最年長のしもべであるエリエゼルに、アブラハムは「あなたの手を私のももの下にいれてくれ。」と頼みます(創世記 24:2)。この「ももの下」が「ヤーレーフ」(יָרֵף)です。次の例は、ヤコブ(イスラエル)がエジプトの宰相になっているヨセフに自分の埋葬を誓わせた場面です(創世記 47:29)です。このように、自分が最も信頼できる者に対して、自分の生殖器の上に手を置かせて(つかませて)重要な誓いをさせているのです。日本にはない慣習なのでなかなか理解できないところですが、いずれもそこには神の隠されたご計画と深く関係しているように思います。つまり、台座から出ている支柱という関係は御父と御子の親密な関係、そして七つの枝の上にあるともしびに象徴される聖霊、つまり、全体が三位一体なる神の象徴となっていないかということです。

●他の例としては、ペニエル経験を記した創世記 32 章に、ある人がヤコブとの格闘の末に彼の「もものつがい」を打ったとあります(32:25)。「もものつがい」は「股の関節」のことですが、この「腰」とも「股」とも「腿」とも訳される原語が「ヤーレーフ」(יָרֵף)なのです。事実、この出来事の後にヤコブに子が与えられていないのは偶然ではありません。ちなみに、女性の場合の「ヤーレーフ」(יָרֵף)隠語の例は民数記 5 章 22 節にあります。

●このように、「燭台」の「台座」に「ヤーレーフ」という語彙が使われているということには深い意味が隠されているように思われます。燭台の全体の構造をよく観察すると分かるように、すべてが台座からはじまり、その台座から出ている支柱の左右に、上に向かって枝が伸びているのです。とするならば、「台座」

と訳された「ヤーレーフ」には、なにかしら**神の秘められたご計画に隠された奥深い事柄と「光」とが密接な関係にある**ことを伺わせます。

(2) 「アーモンドの花の模様が入った支柱と枝」

25:33 一方の枝に、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがくを、
また、他方の枝にも、アーモンドの花の形をした節と花卉のある三つのがく
をつける。燭台から出る六つの枝をみな、そのようにする。

25:34 燭台の支柱には、アーモンドの花の形をした節と花卉のある四つのがくを
つける。



●台座の中央の支柱(幹)と左右の6本の枝には**アーモンドの花の形をした**

節と花卉のある三つのがくの模様が施されています。「アーモンド」は「あめんどう」とも呼ばれます。なにゆえに、「燭台」にはアーモンドの模様が施されているのでしょうか。旧約にこの「アーモンド」の木、あるいは枝についての話が記されています。一つは「預言者エレミヤが見ていた木」がそれでした。もう一つは「アロンの持っていた杖」がアーモンドの木だったのです。

●預言者エレミヤが神によって召された時に、彼はアーモンドの枝を見ていました。

【新改訳改訂第3版】エレミヤ書 1章 11～12節

11 次のような【主】のことばが私にあった。

「エレミヤ、あなたは何を見ているのか。」そこで私は言った。「アーモンドの枝を見ています。」

12 すると【主】は私に仰せられた。「よく見たものだ。わたしのことばを実現しようと、わたしは見張っているからだ。」

●主はエレミヤに「何を見ているのか」という問いかけに、エレミヤは「アーモンドの枝を見ています」と答えています。文語訳は「アーモンド」を「巴旦杏(はたんきょう)」と訳しています。関根訳はここを「目覚めの木の枝が見えます」と訳しています。「アーモンドの木」を「**目覚めの木**」と訳していますが、「見張りの木」とも訳せます。そして、主はエレミヤに「よく見たものだ」(新改訳)と言っています。新共同訳ではそこを「あなたの見るとおりだ」と訳していますが、それは主の喜びが現われています。つまり、主と同じところに目を向けているということに、主が「よくぞ見たものだ」と言っているのです。エレミヤと主の思いが一つになっている事を主は喜んでいるというニュアンスです。なぜなら、主こそ「わたしのことばを実現しようと、わたしは**見張っている**(「シャーカド」**תְּרַשָׁד**)から」です。「シャーカド」(**תְּרַשָׁד**)は、眠らないで、目を覚ましていること、見張っていること、寝ずの番をすること、伺うこと、注意深く期待して待っていることを意味します。

●もう一つは、に、大祭司アロンが持っていた杖がアーモンドの木であったことです(民数記 17章)。民数記 17章には、祭司職に関する論争で明確にされた出来事が記されています。神によって指導者として選ば

れたモーセとアロンが、イスラエルの民の妬みの対象となり、それが「不平、つぶやき」という形で表われました。そこでモーセは、神がアロンを選んだという確かなしるしを示すことでその問題を解決しようとしてしました。具体的には、レビ部族もふくめて他の11の部族からそれぞれ1本ずつの杖(「マッテー」**מַטֵּה**)を用意させ、それにそれぞれの部族の名前を書くようにとモーセは指示しました。レビ族の場合は「アロン」という名前を書くように指示され、それを会見の幕屋の主の前に置きました。モーセは翌日になって天幕の中に入り、主の前に置かれた12本の杖をイスラエル人のところに持って来ました。するとどうでしょう。アロンの杖だけが「**芽をふき、つぼみを出し、花をつけ、アーモンドの実を結んでいました。**」(8節)。この奇跡(しるし)によって、アロンこそ神が選ばれた特別な祭司であり、神からの格別な祝福を与えられていることが立証されたのです。



●祭司の働きは人々を神の御前にふさわしく近づけさせる存在です。大祭司アロンの持っていたアーモンドの木の花の杖は、キリストとその祭司職を象徴的に予表しています。後に、アロンの杖が「契約の箱」の中に安置されるようになったのは、枯れてしまった木が芽を出し、花をつけ、実をならせたといういのちの回復の



象徴だったからです。

●イスラエルにおける「アーモンド」(別名、あめんどう、巴旦杏)は、1~2月頃に他の木に先立って冬の眠りから醒め、芽を出して花を咲かせます。それゆえ「**目覚めの木**」とも呼ばれるのですが、これはまさにイエシュアの「**よみがえりのいのちの初穂**」を象徴しているのです。重要なことは、エレミヤも、主も、神の民の回復(よみがえり)の実現のために、ともに注意を払い、関心を持ち、目を覚まして見張っていたということです。

●「アーモンド」のヘブル語は「シャーケード」(**שָׂקֵד**)ですが、その語源となる動詞の「シャーカド」(**שָׂקַד**)には、「目覚めている」「眠らない」「期待している」「目を見張っている」「注意深くうかがっている」という意味があり、総じて「**回復のための期待**」を意味しています。つまり、「**アーモンドの木**」は、**主のご計画、みこころ、御旨、目的が成就することを待ち望む預言的象徴**と言えるのです。アーモンドの木の花の模様がデザインされた「メノーラー」は、今日のイスラエルの国旗ともなっている希望の象徴です。それは同時に、キリストの花嫁なる教会にとっても、主が再び来られること(再臨)を期待する希望の象徴でもあります。

(3) 「天からの光」の象徴

●さて、聖所の中は外部の自然の光が全く入りこまない場所です。「メノーラー」の火の光だけが聖所にあるものを照らしています。この燭台の火の光がなければ、祭司たちは立ち入って奉仕することができず、供えられたパンの机も、香壇も、垂れ幕も意味をなしません。純金で造られた「燭台」の火の光は、天からの「光」(「オール」**אוֹר**)を象徴しています。それは人間の目には本来見ることのできない「光」であって、その光の写し(型)が聖所にある「燭台の光」なのです。

●燭台の「光」は、「わたしは世の光、いのちの光」と言われたイエシュアを啓示しています。ヨハネはイエシュアのことを、「やみの中に輝く光」(1:5)、「すべての人を照らすまことの光」(1:9)、「世の光」(8:12/9:5)、「いのちの光」(8:12)と紹介しています。この「光」を理解する(悟る)ためには、天からの光が必要なのです。ヨハネの福音書はこの「光」について以下のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書1章9～12節

- 9 すべての人を照らすそのまことの光が世に来ようとしていた。
 10 この方はもともとから世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。
 11 この方はご自分のくんに来られたのに、ご自分の民は受け入れなかった。

【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書3章17～19節

- 17 神が御子を世に遣わされたのは、世をさばくためではなく、御子によって世が救われるためである。
 18 御子信じざる者はさばかれぬ。信じない者は神のひとり子の御名を信じなかつたので、すでにさばかれています。
 19 そのさばきというのは、こうである。光が世に来ているのに、人々は光よりもやみを愛した

●「天からの光」を受けたパウロは、その光によって、初めて自分がやみの中にいることを悟りました。パウロはこの「光」のことを、神が御子においてあらかじめお立てになったご計画、みこころ、御旨、目的そのものとみなしたので(エペソ書1:3～14)。パウロの言う「光の子ども」とは、「光」である神の永遠のご計画のことを悟った者のことです。それは、詩篇の作者の言う「**私たちは、あなたの光のうちに光を見る**」(36篇9節)者たちなのです。

●幕屋建造の目的は神が民と共に住み、神と人とが親しく交わるためのものです。しかし人が神との交わりを豊かに楽しむためには、天からの光が不可欠です。「燭台」(「メノーラー」)には神の鳥瞰的なご計画(=御国の福音)、「メノーラー」にデザインされている復活の初穂を予表する「アーモンドの木」、そして七つのともしび皿が予表している聖霊が現わされています。それゆえ、私たちは、朝ごとに夕ごとに、聖霊の油に満たされながら、絶えず、「揺り動かされない御国」への希望を刷新して行く必要があるのではないのでしょうか。その意味で、「メノーラー」は主にある者たちに今もなお永遠の希望を与えてくれる象徴なのです。

2016.5.22